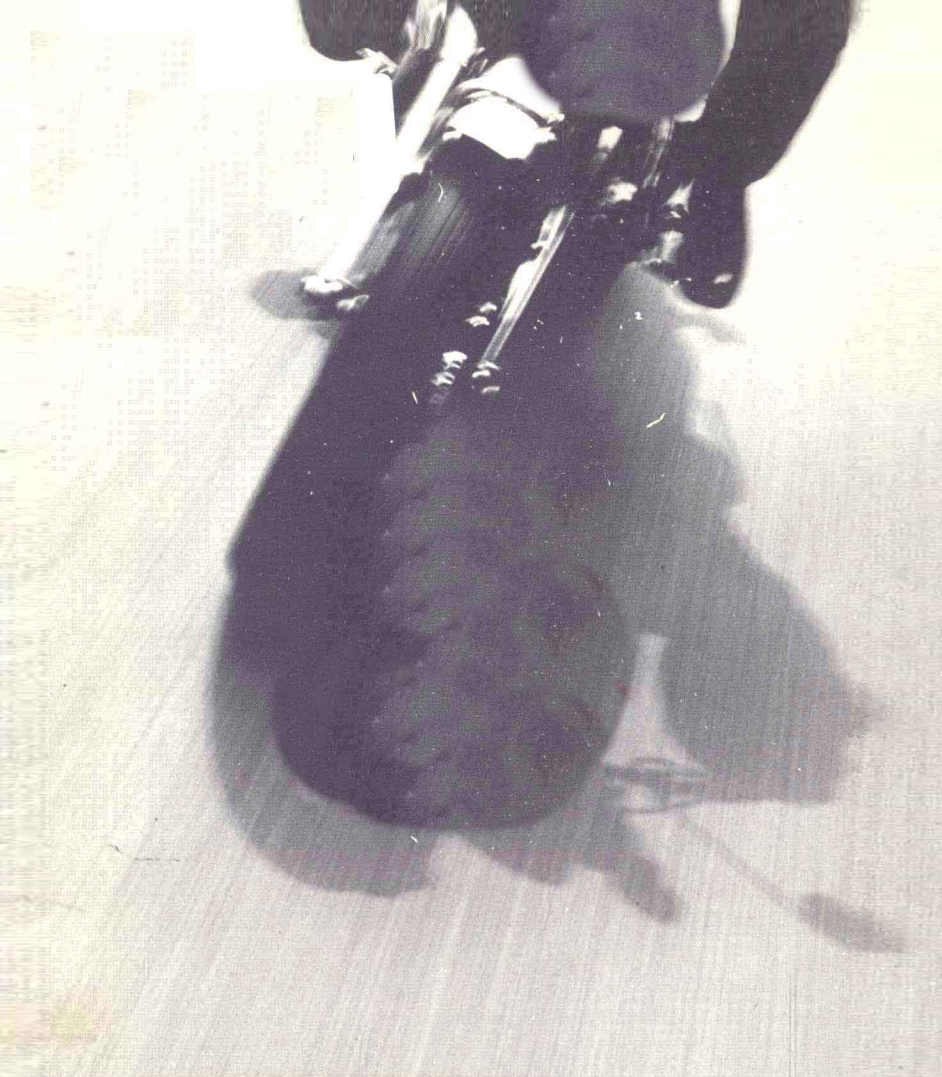






# 彼のオートバイ、 彼女の島

片岡義男

彼のオートバイ、彼女の島

昭和五十二年八月三十日 初版発行

昭和五十二年九月三十日 再版発行

著 者 片岡義男

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三 郵便番号一〇二

振替東京三十一九五二〇八 電話〇三(二六五)七二二一

印 刷 旭印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

0093-872183-0946(0)

彼のオートバイ、彼女の島

ほんとにきみが欲しいんだ、ほんとさ

きみが必要だ、ベイビー、神にきいてくれてもいい

きみなしではリアルにならないんだ

ああ、どうしたらいいだろう

きみのおかげでリアルになれる

きみのおかげで恋人のような気持になれる

まちがったはじめな気持もきみのおかげで捨て去ることができるんだ

恋人よ、きみはぼくをフリーにしてくれる

きみのおかげでリアルになれる

そんな力を持っているのはきみだけ

だからぼくはきみの沈める海の中にすべりこみたい

恋人よ、ぼくをフリーにしてくれ。

ドアーズ『ユー・メイク・ミー・リアル』より

## I

カワサキのオートバイにまたがって、ぼくは、にぎりメシを食べていた。サイド・スタンドが、雑草をまきこみ、土の中にすこしめりこんでいた。かたむいたオートバイのシートに腰をのせ、左足を地面につき、右足は、ステップに軽く置いていた。

高原の涼しい風が、吹きぬけていた。

遠く浅間山のうしろに、入道雲がそびえはじめていた。空は、まっ青。

浅間のずっと左手に、菅平が一望できた。

ぼくは、そのとき、千曲川をはさんで反対側、別所温泉の高原にいた。

今朝、露天風呂のある宿を出てすぐに、ガス・ステーションの自動販売機で買ったにぎりメシ。

夏のさかりの信濃。晴天の下でカワサキにまたがり、浅間の入道雲を見ながらの昼食だ。

とても、うまかった。

お茶があればなあと、ぜいたくなことを思ったとき、うしろに足音がした。

手に持っていたにぎりメシの残りを口に押しこみ、ぼくは、ふりかえった。

若い女のこだった。

ふりかえったとたんに、視線が合ってしまった。とてもはにかんだような表情で、彼女は、微笑し

た。

ぼくは、それどころではない。両方の頬が、にぎりメシで、大きくふくらんでいる。

米と梅ぼしのなかにペロがとられてしまつて、ウンともスンとも言えはしない。ひとつうなずいたぼくは、必死になつて、口の中のにぎりメシを噛んだ。

彼女は、ぼくのほうに、歩いてきた。すんなりした体つきで、軽い足どりだった。ほどよい長さの髪に、化粧の氣のない、小麦色の顔。

おさえた色の、オフ・ボディみたいなコットンの半袖ワンピースに、ストラップのサンダル。大きな半月のかたちをした編みかごを肩にかけ、片手には、地図を折りたたんで、持っていた。

昨日、ぼくがとおつてきた松本の町が、彼女のような夏の旅の女のこたちで、いっぱいだった。

「おほ」

よお、とぼくは言おうとしたのだ。だが、口の中には、まだかなりのにぎりメシがあつたので、こゝうなつてしまった。

ぼくのすぐそばで、彼女は、立ちどまつた。そして、顎を一度だけ、くんとあげて、ぼくの「おほ」のひと言に、こたえてくれた。

顎のさが、かわいい。

目を細めて、彼女は、千曲川のほうを見た。

「入道雲なのね」

きれいな声だ。張りがあつて、軽くて。明るい笑顔と、なぜだか太い太腿を連想させる声だ。

「わかった。あれは、浅間山だ」

地図をながめて、彼女が言った。

「ぼくは、うなずいた。うなずくと同時に、にぎりメシを飲みくだし、  
「よお」

と、言った。

なぜだかとてもまぶしそうに、彼女はぼくを見た。

彼女の瞳は光っていて、目もとにかなりの色気がある。

「はじめてかい」

「はじめてなの。とっても素敵」

彼女は、ぼくのオートバイを見た。

「これ、なんていうの？」

女のこは、みんな、こうだ。

燃料タンクに、KAWASAKIと、エンブレムが入ってるのに。

「カワサキ。いまではもう生産されてないんだ」

「きれいだよ」

黒を基調にしている、タンクだけには、さらに赤と白が使っている。

「どこからきたの？」

「東京」

「これで？」

と、片手をそっと、ハンドルに触れた。

「そうさ」

彼女は、目を閉じた。

高原の空気を胸いっぱい吸いこみ、しばらくとめておき、目を開け、言葉といっしょに、叫ぶように吐き出した。

「うわあ、いいんだ！」

ビニールの竹の皮に、にぎりメシが一個、のこっていた。

「食うかい？」

彼女は、首を振った。

「早くにすませたの。それよりも——」

と、編みかごを肩からはずした。

「お茶」

「ほんとかよ」

小さな平たい水筒を、彼女は、さし出してくれた。

「ほうじ茶。つめたいの」

うまいお茶だった。いっばいあったから、遠慮なく飲んだ。

「お茶が好きなので、持って歩いてるの」

と、彼女が笑った。

のこりのにぎりメシを、ぼくは食べた。

ぼくのうしろのほうにさがってなにかやっていた彼女は、

「カワサキさん」

と、呼んだ。

ぼくは、ゆっくり、ふりかえった。

コダックのポケット・カメラを、彼女は構えていた。シャッターの切れる音がした。

「オートバイごと、そっくりみんな撮れてるわよ」

「ピンぼけだといいな」

「なぜ？」

「片手ににぎりメシ、片手に水筒なもの」

「素敵よ」

フィルムを巻きあげ、彼女は、浅間山を撮った。

「撮ってやろうか」

おにぎりをたいらげたぼくは、ブルージーンズの太腿で手をよくこすり、コダックをうけとった。

菅平のほうをバックに、ぼくはカワサキにまたがったまま、彼女の胸からうえをフレームにおさめ、

シャッターを切った。

右のミラーにかけたヘルメットが、いっしょにうつったはずだ。

「写真を送るわ」

「いいよ」

「だって」

「いいんだよ、別に」

「オートバイといっしょにうつってるのよ」

「うん」

「送るわ」

「そうだな」

彼女は、もう手帳を出していた。ぼくは、東京のアパートの所番地を、言った。

「東京からどうやってきたの？」

「中央高速で大月まできて、20号線で甲府、諏訪、塩尻さ。塩尻からは19号線。昨日、松本をとおったよ」

「これからどこへいくの？」

「上田へ出ようかな。浅間をまわって、帰りは峠をくだるんだ」

「峠？」

「碓氷峠の旧道さ」

「このカワサキで？」

「そう」

彼女は、うらやましそうな顔をして、カワサキを見た。女のこがオートバイに対してこんな表情を見せるのは珍しい。

かわったコだな、と、ぼくは思った。

ぼくは水筒を彼女にかえた。

「サンキュー。うまかった」

別所の安楽寺にある八角三重塔の話を、ぼくたちはした。ぼくも彼女も、その三重塔を見てきたばかりだったのだ。

「国宝だってよ」

「そうなのね。四重なのに、なぜ、三重塔なのかしら」

「さあ」

ぼくたちは、笑った。

塔のまわりの杉木立の、セミの鳴き声をぼくは思い出していた。安楽寺は、信州ではいちばん古い禅寺なのだそうだ。

「これから、どうするの？」

「上田」

「ううん」

彼女は、首を振った。

「今日、いま、これから」

「風をさがして、昼寝だ」

「風を？」

「ああ」

風のおる道を、ぼくは、さがした。

小高い山が、青い空の下に、いくつもつらなっている。陽は高く、カンカン照りだ。だが、吹く風

は、さらっとして、気持ちいい。

おだやかな起伏の中から、よさそうな斜面を見つけ出す。そして、その斜面を上から見おろせる道をさがす。

この山道を650ではまったく重すぎるのだ。でも、バランスをとる練習だと思いながら、なんとか転ばずに、ぼくは山道をこなしていった。

そして、ついに、見つけた。

黄色い花や紫色の花が、斜面ぜんたいをおおったグリーンの草の中に、咲き乱れている。その斜面が、視界いっぱいに見渡せる。

さあっと、やさしく軽い音をたてながら、いちめんの草や花が、斜面の下の方で、波を打つ。すると、まるで海の波みたいになり、一本のほぼまっすぐな線となって横に広がり、その波が斜面の上へあがってくる。風に吹かれた草花が頭を垂れ、右に左に、そよぐ。それが、ひとつの波となって、斜面を這いのぼってくるのだ。

風の動きが、そこに見える。

波は、斜面の上ちかくまで寄せてきて、急に、消えてしまう。草花は、なにごともしなかったかのようになり、静かになる。

ぼくの顔を、風がかすめていく。

これが、風のおり道だ。

斜面を見ていると、いろんな方向から、何度も、おなじことが、くりかえされる。

波は二、三メートルの幅を持った帯となって斜面をあがってくることもあった。風がすこし強いと

きには、こうなる

無数の小さな葉や花が触れ合い、可憐な音が空気の中に広がっていく。

オートバイを降りて、ぼくは、しばらくそれをながめた。

浅間のむこうに、入道雲がひとときわ大きい。千曲川からでも、あの入道雲は、見えるのだろうか。道の反対側にカワサキを持っていってセンターをかけ、ぼくは斜面に降りた。

草に身を投げるようにして、ぼくは、横たわった。

体をのびし、空をあおいだ、

「ああーっ」と、声をあげる。

草の中は、ひんやりと気持がいい。

陽が、さんとさんと降り注ぐ。真夏の青空だ。目をあけると、まぶしい。目を閉じる。まぶたが、オ

レンジ色に燃えている。

まぶたにぎゅうつと力を入れると、オレンジ色が濃い紫色になっていく。

空気が、なんておいしんだろう。

両手をのびし、草を撫でる。

素晴らしい気分だ。

なんの悩みもないと言いたところだが、完璧にそう言いきれぬわけでもなかった。

ちょっとした悩みをかかえて、その悩みのために、ぼくは東京から信州へ、ひとりでツーリングに出てきたのだ。

ぜいたくな昼寝のあと、ぼくは、山道を急いで走った。いつも東京の道路ばかり走っているぼくに  
とって、650RSW3で山道をいくのは、ちょっとしたエンデューロだ。

陽がまだ高くても、山道では、四時をすぎると、気温が急に落ちはじめた。それまでに、ぼくは、  
国道18号線に出ていたかった。

山道を降りながら、気温がさがらないのに、ぼくは気づいた。

上信越高原のほうに、遠く雷鳴を聞いた。

空を見ると、険悪そうな濃い灰色の雲が、急速に広がりつつあった。夕立だ。

降られるな。

と思ったら、もう、燃料タンクにポチン！と音がして、雨滴がひとつ、碎けて散った。

頬にも、当たった。

国道に出たときには、本格的に降っていた。稲妻が光り、雷鳴が轟き、空からまっすぐに、雨が落  
ちてくる。

夕立は、なぜだか、いつも頭上からまっすぐに脳天だけを狙って落ちてくるみたいだ。

雨宿りしようか。

だが、もういい加減、濡れている。濡れついだ、とぼくは思った。洗ってかわかせば、それでい  
い。濡れてしまえ。

雨の日にオートバイで走るのはいやだけど、ツーリングで出会った夕立は、許せてしまふ。それに、ひと夏に一度くらい、夕立につかまってほんとうにずぶ濡れになるのも、悪くはない。

更埴から上田まで、信越本線ぞいに、国道18号。降られっぱなしだった。

戸倉、上山田あたりで、もっともひどかった。

上田にさしかかったときには、ほんとうに、文句なしのずぶ濡れ。パンツまで雨がとおっている。すこし腰をうかし、じわっと体重をかけるようにしてシートにすわりなおすと、ジーンズやパンツにしみこんだ水がしぼり出されてくる。

どしゃ降りのときには、ずぶ濡れも、気にならない。爽快ですらある。

だが、すこし雨足が弱くなってくると、濡れた全身が、不快だ。

もっと降れ。

そう思いながら、ぼくは走った。カワサキは、どんな雨でも、平気だ。前輪のディスク・ブレーキの利きだって、すこしも鈍ってはいない。

どしゃ降りよりもすこし弱くなったまま、雨は安定してしまっていた。雷鳴は、もう遠い。

夏の信州の、夕立の香りは素敵だ。

もっと降れ。

ぼくは、ゴグルをはずした。顎に垂らし、雨滴に顔を叩かせた。

道路の左側に、一軒の建物が、ぼつんと見えた。もう、上田の市内のはずだ。

重そうな、しっかりした黒かわらで屋根をふいた、四角な、古風な建物だ。太い柱がつかってあり、壁は、上半分が黄色い土壁、下半分が、黒く塗った板張りだった。

建物の前にさしかかって、ぼくは、カワサキをとめた。

柱の上のほうに小さな看板がとりつけられており、うすれかけた字で、公共浴場、と読めた。

地元の人たちが無料で利用するお風呂だ。

ゆっくり湯につかって、出たところには、夕立もあがっているだろう。風呂で雨やどりなんて、洒落<sup>しゃれ</sup>てる。

ずぶ濡れの服を、一刻も早く、脱ぎたくなつた。

軒下にオートバイを入れたぼくは、側面の壁づたいに裏へいき、草の中に小用を足した。

ひきかえし、うしろのシートから荷物をはずし、木の棧が何本もついている、妙になつかしい重いガラス戸をあけ、中に入つた。

いっぽうの壁に番傘が一本、立てかけてあつた。ちかくに、下駄がひとりぶん、脱いであつた。

板の間が、まん中のつい立てのような板壁によって、ふたつに区切られていた。そして、その中央の板壁の両側に、棚が何段か、つくりつけてあつた。

ブーツを脱ぎ、板の間にあがつた。

ずぶ濡れのジーンズを両脚からくるめるように脱ぎ、ダンガリーの長袖シャツを、上半身からはぎ取つた。

お湯の香りがした。

裸になったぼくは、濡れた服をひとかたまりにして荷物といっしょに棚の隅に押しこみ、重い木戸をあけ、なかに入つた。

広い洗い場があり、そのむこうが、湯船だつた。黒っぽい石でつくつた湯船だ。高い天井の感じと